

各市の文化財紹介

枕崎市

【 松之尾遺跡 】（市指定文化財：昭和58年3月7日指定）

昭和55年1月～3月，文化庁の補助を受け，県教委と枕崎市が遺跡を調査。五百数十点の土器，刀剣，貝輪，人骨などが発掘された。弥生時代末期から古墳時代初頭の遺跡であると言われ，出土品の一部は復元され市立図書館資料室や地場産業振興センターに陳列されている。昔はこの辺は，琉球人墓があったと旧郷土誌に次の記述があるが，出土品との関係があるのかどうかは明らかでない。

《 琉球人墓 》【 旧郷土誌（明42年編集） 】

琉球人墓は松之尾西端北側にある。高さ五尺幅三尺ばかりの扁平な巨碑で今は半ば壊れ崩れて誌銘は認むる事は出来ぬ。口碑の伝ふる所では琉球船が小湊浦で難破した時，その溺死者をここに合祀したのだというけれども，年代も明確に知ることは出来ない。



琉球人墓に使われていた立石墓

指宿市

【 豊玉媛神社等棟札8点 】（市指定文化財：平成23年5月11日指定）

天璋院篤姫の生家である今和泉島津家の所領地であった今和泉に豊玉媛神社がある。この豊玉媛神社には，棟札が8点收藏され，中宮大明神社（現在の豊玉媛神社）に関連する棟札が6点で，さらに，鹿児島市内にあった伊佐知権現社の棟札が1点，玖玉神社の棟札が1点である。

棟札には，社殿や鳥居，仁王像，宝殿の造営や再興をした記録や，建立に携わった当時の石工や侍衆，地域住民，宮司や庄屋の名前や人数などが墨文字で記されている。

最古の棟札は1544年の戦国時代のもので，最も新しい棟札は1822年の江戸時代後期のものである。2号棟札の内容から，元禄8年（1695）に中宮大明神社に鳥居と仁王像2体を建立し，その仁王像の開眼を，宮ヶ浜にあった長勝院の僧侶快傳が執り行ったことが分かる。この歴史的事実は，この棟札の文面にしか残されておらず，唯一の文字史料である。



南さつま市

けんぼんちやくしよくはっそうね はんず
【 絹本著色八相涅槃図 】 (国指定有形文化財 (絵画) : 昭和 47 年 5 月 30 日指定)

長い歴史と豊かな自然に恵まれた南さつま市には、多くの文化財がある。本市では、国・県・市、合わせて127の文化財が指定、選択または登録されている。

写真の涅槃図は、鹿児島県内の有形文化財 (絵画) の中で唯一、国の重要文化財に指定されているもので、縦2.90メートル、横2.64メートルの大きさで、釈迦の臨終の様子 (涅槃図) が描かれている。また、釈迦の周囲には嘆き悲しむ弟子らや鳥、獣たちが、画面の右上には天から駆けつける仏母の摩耶夫人 (まやぶにん) が描かれている。なお、画面両端には釈迦の生涯の場面 (八相図) が描かれていることから八相涅槃図と言われる。

坊津歴史資料センター輝津館は、普段は実物大のレプリカを展示しているが、毎年11月には実物を展示する。(龍巖寺所有、展示・保管は輝津館)。これ以外にも貴重な文化財が多数展示してある。

また、歴史交流館金峰や加世田郷土資料館にも郷土の宝である貴重な文化財等が多数展示してある。



南九州市

【 かくれがま 】 (市指定文化財 : 昭和 5 1 年 1 1 月 5 日指定)

鎌倉時代 (1192~1333) は、「南無阿弥陀仏」^{なむあみだぶつ}と念仏を唱え続けるだけで苦しみのない幸せな世界 (極楽浄土) へ行けると信じられていた。室町時代 (1334~1573) になると、その教えは大名などの支配の妨げになるとの理由で、「一向宗 (浄土真宗)」の信者たちの取締りが始まった。江戸時代 (1603~1867) には、薩摩藩の支配者である島津氏が一層取締りを厳しくした。そのため信者たちは、洞窟や小川のそばの岩穴に集まり、ひそかに念仏を唱え (これを「かくれ念仏」と言う) 信仰を続けた。

南九州市知覧町霜出校区の立山には、江戸時代の信者が山の斜面に掘った横穴の洞窟が残されている。こうした横穴は鹿児島の方言で「がま」と呼ばれている。

6メートルほど進んだがまの先には小さな阿弥陀如来像が置かれており、当時の信仰の様子がうかがわれる。

